

# 息子

## 江藤あさひ

「あとは腐るだけだな」息子は繰り返した。テレビではノーベル賞を特集した番組が放映されていて、化学に関する理論が説明されているところだった。

「俺には理解不能だな」

画面を見ながらまた言った。

「運と能力に恵まれた少数者の栄誉だ。比べるなんておこがましいよ」僕は気遣う声を出した。

「比べてはいない。ただ俺の脳は終わっていて、あとは腐るだけだと思ってる……」

「ああ、血液が滞れば腐るだろうね」

「血流は徐々に緩慢になっているから、いずれ腐るよ」

「そうか」僕は否定はしなかった。

息子は二十七歳になる。大学を出たあと、一時は不動産会社に勤めたが、挫折して五年間引きこもった。その後、家電のメーカーに再就職し、現在は組立ラインで働いている。契約社員という身分だった。

「その歳で脳が腐ると言われると困るよ。五十五歳の父さ

んはどうすりゃいいんだよ。完璧腐っちゃっているってか？」父さんの脳はまだ大丈夫だ。働いているからね。脳も働く」呟く声で言った。

「お前も働いているんだから、脳は活発に動いているはずだよ」息子は首を傾げた。

息子のIQは高かった。妻が担任に呼ばれて「学校で一番高いIQ」を告げられた。小学校の五年の時だった。

「数値は言えませんが、このまま成長すれば、社会に役立つ人になれる可能性がある」と期待しているんですけどね」

しかし、初老の教師の期待は見事に裏切られた。息子はその頃から親しい友だちの執拗なイジメを受けるようになっていた。IQの高さが嫉妬を呼んだとは言いい切れない。

しかし、情報が漏れたと反射的に感じた。僕は校長室に抗議に行った。息子のクラスでは全員が反省文を書いたという。何と、全員だ。学校が狂っているとしか言いようがない。息子は心に酷い傷を負ったまま取り残されたのだ。ノーベル財団はなぜ心理学賞を創設しないのか、歯がゆいばかりだ。

僕は息子を愛している。諭えようもない存在だ。息子は小学校の五年生の時から死ぬことばかり考えていた。人の恐さと疎外感に怯えて生きてきた。絶望し萎えた脳を抱えてきた。そしてできるだけ目立たないように、脳を扁平に単純にし、維持しつづけて来たのだと僕は思うのだ。組織

や集団は常に脅威だった。人が歪まずに生きられる社会ではない。異常な社会なのだ僕は痛感してきた。

息子は二十七歳で生き直す決心をした。家電のコンピューター部品を組み立てるところから始めた。学歴も捨てた。今は部品の組立に命を懸けている。

僕に似て見栄えはしない風貌だ。目が細くハの字の眉。顔に赤い斑点がある。爪で皮膚を傷つける小さな自傷行為の痕だ。恋人は居ない。妻は「このままで、ずっと三人で一緒に暮らして行きたいわ」と言うが、僕はそのうち息子が恋人を連れて来る日が来ると信じている。

「大学に行き直す気はないのか」

機会ある度に僕は息子に声を掛ける。二十七歳はまだ若い。学び直すチャンスはまだある。息子のために、あと十年仕事を続けるのは容易い気がした。

一度なりとも、心を蝕む「敵」に向かって憤ったことはない。それが唯一の僕の懸念だった。息子が見せる怒りが欲しかった。腹に溜めた憎悪を吐き出す機会がないのは、余りに非力過ぎる。良い子過ぎるのだ。過去を再現するつもりはないが、怒りを爆発させて心の解放を味わって欲しかった。

そして機会はすぐにやってきた。

十一月末の寒い朝だった。二ヶ月続きの夜勤と連日の残業で、酷使した視力が限界を迎えていた。息子の赤い目に

涙が滲んでいた。それでも遅刻はおろか欠勤もしない。僕の出勤時刻に入れ違いに帰って来る。そのまま二階のベッドに直行だと妻は言う。目に湿布をあてがひ、足元の布団に足を上げる。用意した温かいミルク入りコーヒート「骨蜜青玉」と「ブルーベリーA」とかいいうサプリメントが朝食の代わりだ。

その夜、七時半に家に戻ってみると異様な家族が居た。真つ暗な台所のストープの前で妻は赤い炎を見つめたまま放心していた。二階に上がってみると壊れたドアがあった。ドアをこじ開けて中に入る。息子の低く呻く声があった。スイッチを手で探った。灯りに照らされた室内は破壊され、ガラクタの山と化していた。息子は布団や布きれの中で腹這いになっていた。「強くなりたい」と息子は苦しい息の中で呟いていた。「そうなんだね」僕は呟いた。

亀のようにゆっくりと頭を上げて起きあがると、息子は僕に向かって叫んだ。

「生きてみせる。絶対に生き延びてやる」

「そうか」僕は大きな口を開けた。涙が零れる。止めようもなく口から嗚咽が漏れた。

「そうか」と僕は何度も繰り返した。

「どんなに辛くても、人を殺すようなことは止めるよ」と言った。「ああ」と息子は言った。

「腐るなよ」と言う。そして僕は子供のように泣いた。